資 料 5

ローマ字つづりを安定させるための検討に当たって

つづり方の検討に当たって、現在行われている主なローマ字つづりの概要と留意点を以下のとおりまとめた。

○　訓令式（内閣告示における第１表と対応）

日本語を母語とする人が日本語をラテン文字（ローマ字）で書き表すために考えられた「日本式ローマ字」を基にしたもの。日本式では「ぢ」「づ」「を」「くわ」「ぐわ」等の表記又は発音に対応するつづりを含んでいた（内閣告示第２表の下段４行と対応）が、これらを整理し省いている。

現行の内閣告示では、第１表に示された訓令式を用いることを原則としており、学校教育等のよりどころともなっている。

特　長

- 日本語を母語とする人の一般的な認識において区別されているそれぞれの音を、体系的・規則的に示す。五十音図の行と列（段）とに分かりやすく対応している。
- 規則的で簡明であるため、学習しやすい。

課　題

- 一般の社会生活においては、ほとんど用いられていない。

○　ヘボン式（内閣告示における第２表の上段５行と対応）

「標準式」とも呼ばれる。米国人ヘボンが著した和英・英和辞書「和英語林集成」で、日本語をラテン文字で書き表したものによる。外国人として聞き分けた日本語の音に基づくが、日本語母語話者の意見を取り入れるなどの修正が加えられて現在の形に定着。英語との親和性が高い。

主に、日本語を母語としない定住外国人や海外からの旅行者への情報伝達や、国際社会に向けて日本語を発信する際などに、名詞、特に地名や駅名、氏名などの固有名詞を表すために用いられることが多い。

特　長

- 日本語の音を、英語の表記と発音との関係を参考にして表そうとしたもので、実際の音声との対応が分かりやすい。
- 英語が実質的な国際共通語となっているとともに、現在のローマ字表記が主に国際的な配慮に基づいて行われているため、社会生活においてはほとんどの場合ヘボン式が用いられている。海外においてもおおむね同様の状況が見られる。

課　題

- ヘボン式とされるつづり方の中でも、撥音や促音、長音などにおいて複数の書き方が行われており、表記が一つに定まっていない面がある。
- 音声に基づくため、訓令式ほどの規則性がない。

○　検討に当たっての留意点

検討に当たっては、できるだけ統一的な考え方を示すとともに現状に配慮し、社会的な混乱を招くことがないようにする必要がある。また、将来に向けて安定的に用いることのできるローマ字つづりを考えるためには、「国語を表記する上で十分な機能を果たせるローマ字つづりとすること」及び「各分野で定着してきたローマ字表記の慣用を整理すること」と一体的に検討することが重要となる。